

# 平成30年度 全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 花房 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

### 3. 教科に関する調査結果の概要

#### (1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っていた。 ・話すこと・聞くことを問う問題に課題があり、話し合う力を付ける必要がある。
	よってきた問題	・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	・文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書く問題の正答率が低かった。
国語B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率をやや下回っていたが、話し合いの参加者として、質問の意図を捉える問題の正答率が高かった。 ・無解等率が低く最後まで粘り強く問題に取り組んでいた。
	よってきた問題	・話し合いの参加者として、質問の意図を捉える問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じて、内容の中心を明確にして、詳しく書く問題は正答率が低かった。
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全体的には、全国平均正答率とほぼ同じだった。「量と測定」領域の問題はよく出来ていた。 ・「数と計算」、「数量関係」領域の問題は、全国平均を下回り、力を注ぐ必要がある。
	よってきた問題	・分度器の目盛りを読み、180°よりも大きい角の大きさを求める問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	・円の直径の長さが2倍になったとき、円周の長さが何倍になるかを選ぶ問題は正答率が低かった。
算数B	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率をやや下回っていた。 ・「数量関係」領域の問題の正答率が全国との差が大きく、力を注ぐ必要がある。
	よってきた問題	・数学的な考え方を問われる問題でも短答式の問題はよくできていた。
	努力が必要な問題	・グラフに関するメモを見てその着眼点の違いを理解し、言葉や数を使って説明する問題の正答率が低く、無回答率が高かった。
理科	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率をやや上回っていた。 ・A区分「物質」「エネルギー」の問題の正答率が高かった。
	よってきた問題	・海水と水道水を区別するために、2つの異なる実験方法から得られる結果を基に判断した内容を選ぶ問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	・より妥当な考えを作り出すために、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述する問題の正答率が低かった。

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
<p>○「自分にはよいところがあると思いますか」、「人の役に立つ人間になりたい」、「将来の夢や目標を持っている」に肯定的に回答した児童の割合は高く、自尊感情がかなり高まっている。</p> <p>○家で「自分で計画を立てて勉強をしている」、「授業の予習・復習を行っている」の割合が年々高まってきている。しかし、1日当たりの学校以外での勉強時間や読書の時間が1時間より少ない児童の割合がまだ高い。</p> <p>○放課後や週末の過ごし方では、テレビやビデオ、DVDを見る時間やゲームをする時間が本年度も全国を上回っており、日々の生活面の指導を継続し、保護者への啓発も合わせて行っていかなければならない。</p>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<p>○既習事項の定着度確認のために学力サポートシステムの「診断問題」による確認テストを実施し、個々の躓きを把握する。[月1回]</p> <p>○朝の15分間を活用して、曜日と学年を固定し、管理職・教務・担任が指導に入り、学力サポートシステムの「基礎・基本問題」を活用して、基礎・基本の定着に向けて取り組む。また、毎週木曜日の朝学5分間を「音読暗唱ブックひまわり」タイムとし、全校一斉で取り組む。</p> <p>○帰りの会後の20分間を「補充学習タイム」とし、管理職・教務・担任で、学習支援に入る。</p> <p>○学年の実態や学習内容に応じ、管理職・教務が少人数指導に当たる。</p>
---

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

<p>○各クラス宿題チェック、名札等の忘れ物チェックを毎日行い、基本的な生活習慣の徹底を図る。</p> <p>○学年×10+10分間の家庭学習に関して、教員間で内容・量及び「家庭チャレンジHB活用編」の活用について共通理解を図ると共に、学校だより・保護者会等で家庭に周知する。</p> <p>○「家庭チャレンジHB活用編」は月1回、担任と管理職・教務でチェックを行い、児童の意欲的な取組を喚起する。</p> <p>○自学ノートの取組を図る。同学年や他学年の優れたノートを見て、自主学習及び学習ノートを見直すと共に、今後の取組方の参考と意欲付けとなるよう、定めた場所に掲</p>
--